

南方（比島）

一 兵士のレイテ島戦記

愛知県 長坂 正一

私は大正十二（一九二三）年三月十三日、日本

のデンマークといわれた農業の町、安城町で生れました。生家は非農家で、父、母、妹が家族です。

学校は県立農業青年学校卒です。兵隊検査は第一乙種合格で、昭和十九（一九四四）年二月五日、現役兵として名古屋の中部第二部隊に仮入隊しました。所属は独立歩兵第十一連隊（泉第五三三四部隊）第二大隊機関銃中隊、大隊砲小隊であります。

外地派遣の部隊で防疫注射を打たれ発熱して練

兵休となりました。腕章には「燕隊」の文字がありました。食事は大盛りの飯が出て、さすがに軍隊だけあると思えました。使役は馬屋掃除をやらされましたが古年兵から「声が小さい」とハッパをかけられました。

当時の戦況は南方戦線が思わしくなく、空襲のおそれが高まりつつあり、軍隊も空襲に備えての「防空演習」が行われ、初年兵もこれに参加しました。

二月十一日、紀元節の日に家族との面会が許され、脱いでまともにおいた私物を持ち帰ってもらいましたが、これが今生の別れになるかとも思いました。同時に外地行きが間近になったと感じました。

昭和十九年二月十八日夜、予期した外地行き(蒙古)の軍装は、小銃なしの短剣(ゴボウ剣)、雑のう、水筒、背負い袋(背のうの代り)を整え、名古屋城の営庭に集合しました。夜の広小路通りを行進しましたが、いつ集まったのか見送りの提灯の波でした。しかし万歳の声は無く無言の列に送られ名古屋駅に到着しました。そして軍用列車に乗せられ闇夜を一路九州へ、船で釜山經由↓奉天(瀋陽)↓北京↓張家口(北支)↓大同を経て包头(内蒙古)に着きました。この朝鮮↓満州↓支那の旅は半月を要しました。

そして零下三〇度の寒さにびっくりしました。なにしろ「ゴビ砂漠」の一角に位置するのですから内地では想像もつかない所なのです。ここで約三カ月の初年兵教育が始まりました。

軍装は防寒帽、防寒外套、防寒長靴、防寒手袋、(すべて内側に兎の毛皮つき)防塵眼鏡、防毒マスクです。私は大隊砲小隊の所属なので、ソ満国境警備部隊訓練の大隊砲を引いて演習しました。

兵舎は二重窓にオンドルが付いていました。食事は麦・粟・ひえ・きび・高粱・大豆の中へ白米が混ざった飯でした。野菜は中・南支からの乾燥物でした。

学科教育は九州出身の藤田教育隊長が担当で、戦陣訓、軍人勅諭の無用論を聞かされました。しかし内務班では毎食時に勅諭の五ヶ条を斉唱させられました。「早めし、早くそ」がモットーの軍隊で、学課は教育勅諭を筆記させられ、また夕食後は営外で軍歌演習です。「暁に祈る」の歌詞「あゝあの顔で、この声で、手柄立てよと妻や子が、ちぎれる程にふった旗、今も臉に、また浮ぶ」を力いっぱいに歌うと熱いものがぐつとききました。古年兵や教育助手の「気合いを入れてやる」は軍隊教育の決まり手ですから、やられる初年兵は観念して歯を食いしばる。

初年兵教育中に二回ほど、教育隊長引率で外出がありました。そこで一般民間人の生活様式を見学しましたが、見る物聞くものすべてが目新しく

楽しめました。

昭和十九年四月二十九日、天長節に大同公会堂で内地からの東宝舞踊家の公演があり、酒の配給があり、日本飯店では炒飯、饅頭、汁粉の会食がありました。また内地から婦人会の慰問袋ならぬ慰問箱が到着、いろいろな心づくしの品物が分配され、さらに軍事郵便の配達もあって、内地の香りを満喫させてもらいました。

かくしているうちに初年兵の一期検閲も終了し、最後に拳銃射撃訓練があり、実弾三発をもらい、生れてはじめてピストルを撃ったが当りませんでした。

六月、平地泉にある原隊に編入されましたが「演習」という名の討伐に出ていて本隊は不在でした。中旬になると夏用軍装を支給され、予防注射を受け、これは南方戦線に転属する前兆でした。七月十九日、大同に泉兵団が集結しました。第二十六師団(泉)、山県栗花生中将のマニラ戦線行きでした。八月八日、釜山を出航、輸送船「香椎丸」に

乗船、初年兵全員、一等兵に進級しました。

輸送船団は巡洋艦、駆逐艦、改造小型航空母艦付きの三十数隻に上る大船団でした。下関にて船団は集結し、台湾沖で最終的に編成となり、バシ―海峡に入りましたが、米潜水艦の魚雷攻撃を受け、船団は損傷を受けて四散の状況になりましたが、我が「香椎丸」は幸い無事でした。航海中の食事は甲板上に山積みされた南瓜とじゃが芋が毎日出されウンザリでした。

八月二十二日、ルソン島のマニラ港に入りましたが、港には沈められた船のマストだけが突き出ていました。早速、上陸し、マニラ競馬場や日本人小学校に宿営しました。マニラ港に陸揚げされたいろいろな物資を狙って米空軍の大空襲があり、折角集結した物資が焼失しました。そしてルソン島決戦のためバイバイやカバナツアンに疎開し、陣地構築や対戦車攻撃訓練を終えてマニラに集結しました。そこでは内地から補充兵が到着し、直ちに指揮班に編入され炊事班に配属されました。

九月中旬マラリア風の下痢で入院、加療中病状快方に向かったので同僚と二人で外出しましたが、マニラの市街は空爆のため荒れていました。そして米軍がレイテに上陸したので泉兵団はレイテに急派されることになりました。夜間、ゲリラの「ノロシ」が上がり米軍と連絡していました。

十一月八日、マニラ港を輸送船六隻に分乗、護衛艦隊十二隻で出港しました。「和号作戦」の発動です。我が第二大隊の九百七十四人も同乗、出動しました。

十一月十一日、レイ島西岸のオルモックに上陸の予定でしたが、既にそこは米軍に制圧されてしまったので急遽オルモックの南方のイピル港に上陸となりましたが、米軍機の機銃掃射で小笠大隊長以下中隊長二人も戦死する大損害を受けました。そして重機関銃は揚陸を果したのですが大隊砲は砲弾のみの荷揚げで砲身は船上に残存とは残念無念でした。上陸時の装備は手榴弾一個、帯剣、鉄兜、水筒、三角巾、雑のう（白米一升、飯盒、牛

缶一、鮭缶一、乾麵包三）で、背負袋は船中に残存、船団は全滅しました。マニラまで乗ってきた「香椎丸」も十一月十日沈没しました。

イピルに裸で上陸した部隊は、海水で湿った乾麵包一袋だけが兵站給与として支給されました。食物は野生のバナナぐらいで、タロ芋は既に掘りつくされていました。以後、何を食って山中を移動したのか記憶にはありません。

制海空権を失った我が軍は夜間転進しか方法が無かったです。このころ教育隊所属のK兵長が拳銃で自殺をしました。大隊砲小隊では最初の犠牲者でした。昼間は敵の哨戒機が飛んでいるので行動は夜間に限定されており、交代で砲弾箱を担いで搬送するのです。帯剣に縄を巻き防音の上、パラナス川を北上し最前線に赴くのです。

ある中隊では、夜間タバコの火で機銃掃射と艦砲射撃を受け、中隊全滅との報がありましたので米はあれども炊飯不能となりました。アルフェラ（イピル南方）では敵は電波探知機で日本軍を探

索し、夜は照明弾を投下して警戒は敵重極まりな
しでした。山中に入り夜戦開始。彼我の銃砲弾は
百連発の花火の様でした。砲を持たぬ小隊は、た
だ硬直した顔を土手に寄り掛かって遮断するのみ
でした。敵弾の音のブスブスは近距離、ビューン
は遠距離である。そして彼我攻防の小休止時には
ちなまぐさい臭いが、漂ってきます。

再び夜の攻防が始まる。「やられた」の叫びは前
田准尉の声。「その兵隊！ 遺体収容に前進」と
命ぜられるのですが身体が震えてなかなか前に行
けません。「おい早く来い」砲彈落下で出来た穴を
手探りで屍を引きずり入れ、散らばっているバナ
ナの葉で蔽うのが精いっぱい、茶毘にすること
は無論のこと埋葬もできません。即死の声は「ア
ー！」とか「ウー！」で、「おかあさん」らしき声
は聞いたが、「天皇陛下万歳！」はK兵長自害時の
み聞いただけでした。

激闘の一夜が明けます。硝煙けむる淀んだ空気、
頭の痛みに鉄兜を取ると、その星章のわずか右寄

りに砲弾片の凹みを発見しました。長坂一等兵
(私)は星章に当たっていたら、この地で戦死して
いました。私は右上腕部に掠り傷を負い、小林衛
生上等兵の手当てを受けました。

戦場は次第に山地の中へと移り、その夜も双方
小競り合いの交戦が続き、友軍は善戦の末、物量
豊富な米軍は武器、食糧を放棄して撤退しました。
直ちに食糧確保の決死隊が指揮班で結成され、下
士官以下十人ほどの中に私も加わりました。「山
と「川」の合言葉を確認し合い、南十字星の輝き
もない真暗闇の山中を登りました。そして手当た
り次第に缶詰、チョコレート、煙草など(レーシ
ョン)を雑のうの中に詰め込み、その帰路はいや
に月空が明るかったのです。この島には蛇やトカ
ゲは生息していませんでした。

○月○日、山中、この日もまた交戦の気配濃厚
で、エンピを持たない我が小隊では、タコ壺を斜
面に掘るのに軍手をはめた素手掘りでした。まだ
静かな夜、風に乗って敵の歩哨の英語や口笛が、

かすかに聞こえます。最前線だなど意識しました。やがて夜半の雨の中でタコ壺では腰まで水に漬かり朝を迎えました。記録によりますと、我が大隊はジャングルの山越えをして、ブラウエン飛行場の奪回作戦の命を受けていました。その際に高千穂空挺隊が落下傘降下により、掩護するとの図式であつたとのことでした。

またこの地点は我が中隊全滅のパラナスの丘「血染めの竹藪」付近と記されています。

○月○日、山中。その日は、なぜか昼間の戦闘でした。浴びるほどの重砲弾の降る中で、教育隊長の藤田中尉は、戦死の射手に代わり重機関銃を射ちまくり、壮烈な戦死をされたと、のちの収容所で伝え聞きました。

自分はタコ壺の中で突如として一瞬、焼け火箸を突き付けられたような衝撃を左大腿部に受け、迫撃砲弾の直撃だと知り、早速、三角巾で負傷箇所をくくりました。熱っぽい全身のみで、激痛は今が無い。昼の戦いは敵の照準も正確さを増し、

飛来する銃砲弾によって多くの戦友の「断末魔」の叫びを聞きますが戦闘下では、その全貌ぜんぼうは定かには分かりません。なおもひとひきりの交戦があつて、ようやく休戦となり、時は今と、我が中隊にも「転進」(撤退)の命が下ります。猶予はない迅速行動に移らねば再び戦火の渦に巻き込まれません。

この負傷兵もタコ壺からはい出し、足を引きずりながら中隊の後を追います。その斜面には散々として戦友の屍が重なり、その中に有田同年兵の戦死体を確認しました。そして下り坂を急ぎながら道端の小枝を杖代りにしてなおも本隊を追いました。

途中、一軒のニツパ小屋の中に話し声があり、それは友軍でした。負傷箇所の痛みが増し、小休止を申し出ました。その野砲分隊の下士官は心良く炉端に招いてくれ、水牛の肉を食えと、進めてくれました。「泉兵団はどこへ?」「この道を下っていった」厚く礼を述べ退出しようとしたところ

「この焼き肉を持つてゆけよ。俺達も明日はどうなっているか分からないからね」といいます。当方が負傷兵とは申せ、次の食糧確保が至難の技であるのが、その時の環境でした。

やがて砲弾でえぐられた椰子林や艦砲射撃でやられた凹凸道をヨタヨタ下ると、その平坦地のニッパ小屋の高床下が負傷兵の收容所でした。その一団の中に阿垣同年兵が肩をやられて先着しており、「何か食うものは無いか」「無い」といいました。確かに先ほどの焼き肉は持っていました。二人だけで食べるわけにはゆかぬと思いました。しかしその後もこの肉を食べた記憶はないのです。その日の夜になってからだ。歩ける者は「整列せよ」との号令で、はい出るもの立てません。「歩けない者は待機」で再び床下に腰を下ろす。情報ではこの地点も安全では無くなったらしい。数日後の夜、担送負傷兵の仲間となりました。担架による四人搬送の要員は、時折、流れ弾の音に伏しつ、ようやく丘の上の底床ニッパ小屋に運

搬してくれました。

收容されてから今日まで、軍医の診療は無論のこと、衛生兵による傷の手当てや薬の投与など全く無い。傷口の痛みは徐々に弱まりましたが、毎日拳大一個の握り飯だけの支給では、体力の回復の足しにはなりません。幾日たったか記憶不明ですが、ただ一個の握り飯さえ絶えてしまいました。戦況は全く不明で、銃砲弾音は遠雷のごとです。その明るる日、十三人の負傷兵は衆議一決、

「このままでは餓死だ」と歩ける十二人は「助けにくるから頑張れ」と各自が気休めの言葉を弱々しく残して、ぞろぞろとどこかへ消えて行きました。記録では「十三人は山中に消えた」とあります。しかしその戦友たちは再び帰ることはなかった。私はただ一人その小屋の中で、以後、灼熱の晴れと雨の日を過ごしました。

遠雷のごとき砲声も、今日は途絶えている。静寂。何も食っていないのに、マラリアの下痢は続く。小屋からはい出しての用便中、一人の遊兵と

目が合いました。負傷兵と分かると「頑張れよ」と言って食べかけの鮭缶を足元に置いて去りました。後ろ姿に思わず手を合わせました。

負傷当時から左大腿部の傷口は三角巾での仮包帯のままでした。熱気で発生したウジが、そのころになると、膿と一緒に大量に出だした。回顧するに、この現象が幸いして、化膿をまぬがれたのです。

なけなしの鮭缶も舐めるように大事にしていましたが、それも終に底をつく。ああ。明くる日、既に極限の体力のみで、意識もモウロウとしてきました。栄養失調と傷の痛みの中で、微かに「生きる」気力のみが働きます。移動の前夜、窓から望む南十字星が朧おぼろに光を放つ。孤独。

○月○日、野外。その日、いつの間に小屋から脱出したのか分からないが、立てないので腰をずらしての一步一步の歩みである。その丘を下る途中、軍靴の凹跡に僅かに溜まった「泥水」をすする。はるか下の方で水音が聞こえるようだ。そこ

の川まで果して着けるかどうか。戦闘による地面の崩れや倒木を避けながら、有る限りの神経を足元に集めて、なおこの動作は続けました。

突如、実に突如である。「ホールドアップ」の聲に、虚ろな目で見上げました。照りつける日差しの中にいたのは、米兵一人と二人のゲリラ兵が立っていました。敗残兵捜索隊に発見されたのでした。その自動小銃（マンドリン）と、手を挙げるとの仕草に自然と手を上にもしました。武装解除は帯剣のみ、「立て」の合図に、手で足を負傷していると示すと、うなづいた米兵はゲリラ兵に背負ってやれと指示する。

運ばれた前線基地のテント内で米軍医の応急処置の「添加物」ような薬が負傷個所につけられ、そして一人の「生きものは救われたのです。その捕虜は、小屋の中の暮しで、帯剣や雑のうの中の一個の手榴弾による自決も、また「生きて虜囚の恥ずかしめを受けず」の鉄則も、全くその脳裏には留めていなかった。悪夢のような武勇

伝のまったくない、従軍記はこれで完結です。

(ハロ収容所にて)

米軍将校曰く「貴方達は精神力では勝ったが物量に負けたんです」。

記録

比島戦五十万人。

内、泉師団レイテ戦死者一万六千九百九十八人、生還者三十六人、第二大隊九百七十四人中生還者五人。

収容所レイテ島ハロ収容所(フイリピン)。帰国アメリカ、リバテ―船でハロ港出發。

浦賀港に昭和二十年十二月二十日帰国。

復員者三人(自分含)によって、国鉄安城駅に「復員者接待所」を町の青年団(自分は書記長)の協力を得て開設しました。

バターン島従軍記

福井県 大森 榮 一

鯖江は福井県の中央に位置し、神社仏閣も多く、また古墳群も確認されているものには幾多のものがあります。産業としては眼鏡枠製造は古くから知られ、現在は世界的にも有名で、その他、繊維、漆器などが盛んに行われてきました。また、西山公園は県下に誇る桜の名所として知られ、昭和三十年代に行われた町村合併によって鯖江市が誕生以来、つつじの公園として観光客で賑わっています。

このような経済的、自然・産業的環境にも恵まれた土地で育った私にも徴兵検査の日がやってきました。身長、体重共に兵隊にかりだされる心配ないと自他共に認めていた通り「丙種合格」でした。兵隊に行かなくてすむので、家業の漆器木工業技術習得に懸命に努めておりました。